

愛知県三河地方郡市町村史に見られる方言記述・研究

A short survey on studies and descriptions of Mikawa-Dialect

山田 敏 弘
YAMADA Toshihiro
lingua@gifu-u.ac.jp

1. はじめに

前稿 山田 (2014) においては、愛知県尾張地方で、明治末から昭和戦前期までに為された、郡市町村史を中心とした方言記述について考察した。それにより、愛知県尾張地方においては、隣県岐阜県と比べて、明治期の全国的な調査である国語調査委員会による各地方調査要請 (1900) に対する調査報告こそ多くは為されなかったが、名古屋市教育会による『方言調査報告書』(1903)、および『名古屋ことば』(1909) など、重要な刊行物が上梓されたことをはじめ、特筆すべき調査・記述がおこなわれてきており、昭和戦前・戦中期に多くの調査・記述がおこなわれたことを明らかにした。

今回は、この前稿と比較しつつ三河地方を概観していく。

2. 明治・大正期の愛知県三河地方における方言研究・記述

すでに郡史類については、前稿 (2014) にて、岐阜県と愛知県を比較しつつ、三河地方における記述についても概観したが、本考察においても、三河地方における方言記述の黎明期となる明治・大正期の郡史から見ていく。

三河地方でこの時代に編纂された郡史類の中で、特に重要なのは、『碧海郡誌』(1916) と『三河國額田郡誌』(1924) である。『碧海郡誌』は、項目数が1000を超える方言記述を有し、この時代、全国でもっとも豊かな記述をおこなったもののひとつとして特筆すべき存在である。また、それに次ぐ方言記述量をもつ『三河國額田郡誌』については、その元となった資料の存在も知られているなど、郡史における記述成立の過程を知る好材料となっている。本節では、これら2点の郡史について、前稿では触れられなかった関連する記述と合わせて掘り下げて見ていく。

2.1 郡史類に見られる方言記述

前稿 (2014) にも挙げたが、愛知県内の郡史類に見られた方言記述は次の通りである。なお、重複を少なくするため、愛知県内で明治20年代から30年代にかけて多く出版された、児童対象の地誌を中心とした旧郡史類は省いて載せる。また、「語」ではなく「項目」としてあるのは、ひとつの項目に複数の俚言形が挙がる場合もあり、必ずしも語数ではないためである。

地域	郡史類	編著者(機関)/発行者	発行年	方言記述
尾張	『丹羽郡誌』	愛知県丹羽郡教育会/同	大正6年(1917)	72項目
	『東春日井郡誌』	東春日井郡役所/同	大正12年(1923)	693項目
	『愛知県西春日井郡誌』	日比野寛(校閲)/愛知県西春日井郡教育会	明治43年(1910)	なし
	『西春日井郡誌』	西春日井郡/同	大正12年(1923)	536項目
	『尾張國愛知郡志』	愛知郡役所/同	大正12年(1923)	866項目
	『知多郡史』	知多郡役所/同	大正12年(1923)	なし

三河	『西加茂郡誌』	西加茂郡教育會/同	大正15年 (1926)	102項目
	『愛知県東加茂郡誌』	東加茂郡/同	大正10年 (1921)	なし
	『碧海郡誌』	碧海郡教育会/同	大正5年 (1916)	1006項目
	『愛知県幡豆郡誌』	幡豆郡役所/同	大正12年 (1923)	なし
	『三河國額田郡誌』	額田郡役所/同	大正13年 (1924)	403項目
	『南設楽郡誌』	南設楽郡教育会/同	大正15年 (1926)	127項目
	『八名郡誌』	八名郡役所/同	大正15年 (1926)	数行あり
	『渥美郡史』	渥美郡役所/同	大正12年 (1923)	なし

すでに前稿でも述べたが、尾張の『丹羽郡誌』(1917)と『愛知県西春日井郡誌』(1910)、および三河の『碧海郡誌』(1916)を除き、この時代の郡史の大半は、大正12年(=1923)の郡制廃止に伴って急遽発刊を迫られたものである。

一方で、明治36年(1903)と明治41年(1908)には、国語調査委員会から各府県に対して音韻ならびに口語法に関する調査依頼があった。このうち明治39年調査については、『音韻調査報告書』(1905)ならびに『口語法調査報告書』(1906)(いずれも別に『分布図』あり)として報告されているが、明治41年調査については、長野、静岡、岐阜、大阪で、部分的にまとめられたものが刊行されている(竹田2008:63-64)が、全体像はついに明らかにされないままとなった。

それでも、これらの調査の影響は、各地の、特に郡史類の方言記述に見られ、口語法に関する調査内容は、『愛知郡誌』(1923)、『碧海郡誌』(1926)、『額田郡誌』(1924)で、この調査を直接・間接に参照したと考えられる文法事項の記述として多く見られる。ことに専門的分析力を必要とする口語法、すなわち文法事項を中心とした事項については、国語調査委員会による調査の影響が大きかったと考えられる。

一方、ここで考えなければならないのは、愛知県各郡史において、なぜ語彙が収集されたかということである。明治時代に国語調査委員会がおこなった調査の目的は、「主トシテ普通教育ニ於ケル假名遣ノ改正及ビ標準的發音ノ制定ノ参考ニ供センガ為メ」(国語調査委員会編1905:1)であり、「専ラ標準語制定ノ参考ニ供センガ為メ」(同:1906:1)であった。標準語制定を目的とする以上、音韻や文法表現も大切であるが、語彙の重要性はそれに勝るとも劣らない。それは、当時の文部省でも十分な認識はあったはずであるが、全国的な調査としては、この時代、おこなわれなかった。

一方で、地方では国語教育において、やはり重要なのは語彙であるとの認識が強かったと考えられる。特に、特別な音訛が目立つとの認識が乏しかった東海地方では、「方言調査」と言えば、やはり俚言の収集であると考えられて当然であった。郡史類にも、口語法と並んで、必ず語彙の記述が見られる。語彙の中には、音訛によって方言となったものもあるが、すべてが音韻で説明の付くものではなく、語彙的に特徴あるものも多い。自発的に各地で独立した方言記述が興ったのが語彙からというのは、至極当然な帰結だったのである。

ただ、この点については、中央の情勢とよりよく比較した考察が必要である。その点は、今後の課題とする。

2.2 碧海郡

前稿では、尾張地方で、明治から大正にかけて、『猪高村誌』(1918)、『古知野町誌』(1925)、『小牧町史』(1926)の3点に、方言記述が含まれているが、大半の町村史においては記述が見られないと述べた。

一方、三河地方においては、同時期、あるいは、やや先だっというれも碧海郡において、『新川町

誌 補遺』(1910),『大濱町誌』(1916),『六ツ美村史』(1926) という3つの方言記述が見られる。膨大な語彙記述を有する『碧海郡誌』と比較しながら、当時の方言記述に関する情勢を見てみたい。

『新川町誌 補遺』については、『碧海郡誌』よりも6年早く刊行されている。内容としても、『新川町誌 補遺』では、方言を五十音順に挙げるのに対し、『碧海郡誌』では、名詞、動詞等の品詞別に大別したのち、天文、地理、地文として、「太陽」「月」「星」など意味分類で分けて掲載している。個別に見ても、『新川町誌 補遺』では、方言が項目として挙げられた上で、その共通語訳が添えられるのに対し、『碧海郡誌』では、共通語の概念に該当する俚言形を収集する形で、多くは複数の方言形式を拾っている。方言語彙の収集から始まり提示順が整理された『新川町誌 補遺』に対し、全国共通語に対応する語形としてどのようなものがあるかを収集していく『碧海郡誌』とでは、ボトムアップかトップダウンかという記述方針の基本的相違が見られるのである。前者のほうがより初歩的といっは語弊もあるが、基礎資料的な意味合いの強いものであったに違いない。

『大濱町誌』(1916)も、基本的には『新川町誌 補遺』と同じ提示順であるが、さらに方言形あとに挙げられた共通語形に対し「正」と付していることも見逃せない。つまり、地域におこなわれる「誤った言語」である方言形を教育して正しくしようという意図が、より一層明確になっているのである。

碧海郡においては、実は、この意識の差も興味深い。おそらく『新川町誌 補遺』も『大濱町誌』も、『碧海郡誌』の基礎資料となったことは間違いない。同郡誌「第十一編 風俗, 第二章 方言」の記述にも、「先に當教育會に於て詳細調査したるものにして、多くは郡内各地よりの通告を其儘に記入したるものなりとす」とある(同:816-817)。この「通告」に2町史の記述が入っていないとは考えられないからである。事実、『碧海郡誌』に収められている語形などは、これら2町史のものとは違わない。

しかし、『碧海郡誌』には、「世に方言矯正の聲高し。されど方言は方言にして其の地方に特有の立派なる言語にして、矯正の餘地更になし」(同:816)とある。『大濱町誌』に見られるような方言矯正的立場とは一線を画している。

たしかに、これはこの部分の著者の立場に過ぎないかもしれない。ただ、『碧海郡誌』は、方言調査に関する熱意と蓄積を、既存の2町史から引き継ぎながらも、標準語制定という国策に対し、地方の文化である方言を、どう理論的整合性のあるものとして位置づけるかを考えながら編まれたものと考えることができよう。

2.3 額田郡

岡崎市立中央図書館には、『額田郡誌資料』と題された、大正期に収集された一連の資料群が存在する。貴重な資料であるためもちろん複写ではあるが、開架ですぐ手の届く場所にあることから、この資料を十分検討することが可能となった。本節では、この貴重な資料群から、『額田郡誌』の位置づけを考えてみたい。

なお、一連の「額田郡誌資料」は、複写され公開された部分に表紙が添えられていない資料(ここでは丸括弧付きで表す)もあり、岡崎市立中央図書館の蔵書検索においても年号はすべてにおいて付されていないなど、草稿レベルの資料である。また、多くに「郡誌編纂資料」などと銘打たれており、方言だけではなく、地域の概要全般を報告したものであり、その中で方言が一項目として位置づけられている。

大正年間、額田郡には1町15村あったが、そのすべてから尋常(高等)小学校区単位で報告がなされている。調査年については、送り状があるもの(以下の表では備考に「送り状あり」として記す)

1本編の上中下の三巻は同年刊行。

のほとんどが「大正九年」とあることから、送り状が伝わってきていないものについても、おおよそ同年の編纂であったと推察される（『南部並雑考』が大正12年であるのは、それなりの理由があつてのまとめ方であろう）。

網羅的かつ一斉に調査がおこなわれ報告されたことは、大正13年に刊行される『額田郡誌』の資料であることから考えれば、当然である。

資料名 ()は表題なし	調査年	方言記述	備考
郡誌編纂資料 男川村ノ部	不明	概説, 音韻, 語法, 語彙(名詞29, 代名詞6, 形容詞6, 接續詞8, 感動詞3, 接尾語5*, 副詞12, 音便4動詞, 動詞25, 助動詞及助動詞の連続23, 敬語6, 雑25)	
美合村々誌/美合尋常小學校	大正9年	名詞中心に194項目	「方言」「正しき語」
(額田郡誌資料 常磐)	不明	品詞別に, 名詞523, 代名詞39, 動詞171, 形容詞49, 副詞84, 助詞3, 接統詞16, 感動詞15。計900項目(方言形)	
郡誌編纂資料調査/常磐南尋常小學校	不明	順不同22形式(付記として「俗語 特種 ^マ ノモノナシ」とある)	「正」「誤」
額田郡誌編纂資料要項/常磐東尋常小學校	大正9年	順不同13形式(「重ナルモノヲ擧グルバ左ノ如し」とある)	送り状あり 「方」「正」
郡誌編纂資料/岩津尋常高等小學校	大正9年	五十音順132項目	
郡誌編纂資料/奥殿尋常高等小學校	不明	順不同17項目	「方言」「意義」「用例」
(額田郡誌資料 細川)	大正9年	順不同32項目	
郡誌資料/大樹寺尋常高等小學校	不明	順不同10項目	
岩津村恵田學区額田郡誌資料/恵田尋常高等小學校長 岡田榮次	不明	個々有名詞11項目, 其他用語10項目	
(額田郡誌資料 福岡)		方言記述なし	
郡誌編纂要項調査/本宿尋常高等小學校	大正9年	順不同34	送り状あり 「正」「誤」
額田郡誌編纂資料調査要項資料 龍谷尋常小學校	大正10年	順不同に82形式	送り状あり 「方言」「標準語」
(額田郡誌資料 秦梨)	大正9年	概説のみ	送り状あり
(額田郡誌資料 生平)	不明	順不同5形式	
郡誌編纂資料(山中村)	大正9年	人称詞10, 呼びかけ2, 他(用言, 表現)16	送り状あり
(額田郡誌資料 藤川)	大正9年	方言記述なし	送り状あり
額田郡誌編纂資料調査 形埜村	不明	順不同に127	「正」「方言, 訛」

(額田郡誌資料 宮崎)	大正10年	一文のみの記述あり	
額田郡誌編纂資料調査書／ 宮崎村北部千万町學校通學区分	不明	名詞59, 形容詞・動詞53	「正」「方」
郡誌編纂資料／大雨河尋常小 學校区域	大正10年	5行の記述あり	
郡史編纂資料／豊富尋常高等 小學校	大正9年	方言記述なし	
額田郡史(豊富村夏山學校務 区内)夏山學校 仲紫■■■**	大正9年	敬語の「セ」に関する記述2行	送り状あり
郡誌編纂上必要諸項調査書 (烏川尋常小學區域)	不明	方言記述なし	
(額田郡誌資料 下山)	大正9年	名詞100, 代名詞14, 形容詞44, 動詞27, 副 詞17, 助動詞9, 接續詞9, 連語39, 敬語11, 雑28	送り状あり 「誤」「正」
(額田郡誌資料 深溝)	不明	方言記述なし	
額田郡誌資料 南部並雑考	大正12年	方言記述なし	

*実際には、副助詞と伝聞の助動詞を挙げる。

**判読不明

中でも「常磐」とある資料は、群を抜く存在である。『額田郡誌』でさえ400項目強の項目数であるにもかかわらず、この常磐資料は、その倍以上の方言形式を採取し報告している。残念ながら、本資料には、管見の限り、送り状を含めその成立事情を示すものが何も付されていない。そのため、どのような背景を持つ人物が、どのような意図で作成に関わったかを何も知ることができない。

また、この一連の「額田郡誌資料」は、岐阜県内の旧海津郡地域で収集され、同じように郡役所に報告された大正4年海津郡役所編による『方言調査書類』と、すべて小学校名の付された原稿用紙に手書きで認められている点など、ほぼ同一の形態を採っていることも興味深い。ただし、海津資料は、文部省国語調査会からの委嘱に基づき収集・編纂された方言に限定された資料であると推察されるのに対し、「額田郡誌資料」は、その名の通り、郡誌に収められるべき項目を広く調査し報告している点が大きく異なる。また、海津資料が方言に特化したものであるのに対し、額田資料では方言に関する報告がないものもあり、また報告があっても極めて簡単な報告に止まっているものも多い。形式は似ていても採取・報告の目的がそもそも異なるのである。

それでも、海津資料よりも広範囲の地域から詳細な報告が、方言に関しても集まってきている点で、額田郡は碧海郡に次ぐ、三河地方を代表する存在となっていると言える。

『額田郡誌』とこれら一連の「額田郡誌資料」を比べても、調べるべき方言項目のひな形が示されて調査されたわけでもなく、各地でそれぞれ愚直に俚言形を集めたものと推察され、質量ともに大きな差がある。計画性のある調査依頼であったかは、疑問のあるところである。結果、せっかく集められた俚言形であっても、郡誌に記載されなかったものがある。この資料については、今後、語形を比較しながら詳細に検討することが必要である。

3. 昭和戦前・戦中期の愛知県三河地方における方言研究・記述

昭和初期は、もっとも盛んに方言研究がおこなわれ成果を挙げた時代のひとつである。尾張地方では、戦争終結までの20年間で、この時代の市町村史の約半数となる11の市町村史類に方言記述が見ら

れた。

一方、三河地方では、1927年から1945年までの約20年間で、24編の市町村史が編纂されているが、そのうち8編のみで方言記述が見られる。三河地方は、山間部を含め小さな町村が多く、市町村の数に比べてこの時期に編纂された市町村史は多くない。それでもやはりその中で方言記述が少ないのはなぜなのか。それを考えてみたい。

3.1 郡市町村史における方言ならびに共通語の扱いの変遷

三河地方の郡市町村史に見られる方言記述について、簡単に明治時代のものからまとめておく。

郡市町村史	発行年	配列順・項目数など	共通語の名称	方言形の扱い	備考
『新川町誌 補遺』(碧海郡)	1910	五十音順に357項目	—	主	
『碧海郡誌』	1916	品詞, 意味別に1006項目*1	—	従	
『大濱町誌』(碧海郡)	1916	五十音順に476項目	正	主	
『三河国額田郡誌』	1924	品詞別に403項目*2	標準語	従	
『八名郡誌』	1926	数行の記述	—	—	
『六ツ美村史』(碧海郡)	1926	意味別に語彙447項目, 文末表現86項目, 音訛・造語法62項目*3	—	従	
『西加茂郡誌』	1926	名詞が意味別に102項目*4	—	主	
『南設楽郡誌』	1926	意味別に127項目*5	—	従	
『矢作町誌』(碧海郡)	1928	意味別に26項目*6	—	主	
『旭村誌』(碧海郡)	1930	意味別・品詞別に106項目*7	標準語	従	
『岡崎市史』第8巻	1930	品詞別に457項目*8	—	従	
『刈谷町誌』(碧海郡)	1932	品詞別に248項目*9	—	従	
『宮崎村誌』(幡豆郡)	1932	品詞別に119項目*10	標準語	従	
『西尾町史』(幡豆郡)	1933	品詞別, 意味別に22項目*11	—	主	
『岩津町誌』(額田郡)	1936	順不同に50項目	標準語	従	ら抜きことばあり
『大村史』(豊橋市)	1938	五十音順に544項目	—	主	

* 1 : 名詞, 代名詞, 数詞, 形容詞, 動詞, 副詞, 接續詞, 助辭, 助動詞の活用形, 「時法等の言ひあらはし方」, 待遇, 方言分類例など。名詞は, 「天時, 地理, 地文に關する名稱」: 曆時, 方位, 氣象, 地理, 「博物に關する名稱」: 獸類, 鳥類, 魚介類, 蟲類, 穀類, 菜蔬, 果實, 草木, 鑛石, 「人倫に關する名稱」: (親族語彙), 人品, 「身體に關する名稱」: 頭部, 胸腹部, 四肢, 排泄物, 疾病, 「衣食住に關する名稱」: 服飾物, 家屋, 家具武器, 飲食, 「神佛人事に關する名稱」: 神佛, 慶弔, 歌舞音楽, 遊技娛樂, 「殖産興業に關する名稱」: 農事, 漁獵, 商賣, 「運輸交通に關する名稱」, 「雜」に分類される。「助動詞の活用形」, 「時法等の言ひあらはし方」に關しては, 過去, 未来, 完了, 継続, 受動, 打消, 疑念反語, 推量想像, 条件理由, 決意, 希望願望, 伝聞, 命令, 禁止, 感情等に分けられる。

* 2 : 名詞, 代名詞, 形容詞, 副詞, 動詞, 助辭, 接頭辭, 接尾辭, 感動詞, 助動詞。

* 3 : 「天文・地理・地文に關する名稱」, 「人倫に關するもの」, 「殖産業に關するもの」, 「雜のもの 代名詞・數詞・形容詞・動詞」, 副詞, 接續詞, 助辭(格助詞等), 動詞形容詞の活用, 助動詞の活用, 時法の言ひあらはし方(過去, 未来, 完了, 継続, 受動, 使役, 打消, 疑念反語, 推量想像, 条件理由, 決意, 希望, 伝聞, 命令, 禁止, 感情), 待遇, 接辭, 方言分類例。

* 4 : 天文, 地理, 家屋, 人倫, 身體, 人品, 物品, 衣服, 飲食, 動物。

- * 5 : 天文, 地理, 家屋, 人倫, 身体の部其他, 人品, 物品, 衣服, 飲食, 動物, 植物, 雑語, 應對用語。
- * 6 : 天時, 地野, 家居, 人物, 人品, 物品, 動物, 植物, 行爲, 雑。
- * 7 : 天文・地理・地文に関する名称, 動物に関する名称, 植物に関する名称, 人倫に関する名称, 殖産業に関する名称, 代名詞に関するもの, 形容詞に関するもの, 動詞に関するもの。
- * 8 : 名詞, 代名詞 数詞, 副詞, 形容詞, 動詞, 助動詞 動詞等, 接續詞 感動詞等。
- * 9 : 名詞, 代名詞, 副詞, 形容詞, 動詞, 助動詞 動詞等, 接續詞 感動詞等。
- * 10 : 名詞, 代名詞, 形容詞及副詞, 動詞及助動詞及接続詞, 接頭詞及接尾詞, 感動詞及助動詞。
- * 11 : 名詞, 代名詞, 動詞, 形容詞, 副詞, 雑。名詞は, 天時, 人稱, 身體, 衣食住, 動植物, 雑。

地域的な特徴としては、初期に碧海郡の町村史が多く見られることである。また、『六ツ美村史』などは、『碧海郡誌』と同じ配列順となっているなど、明らかな参照関係が見られる。尾張地方における『丹羽郡誌』や『愛知郡志』のように、郡史は郡内外に範となり大きな影響を与えていく。ただし、それは常に基盤としての器を作ったに過ぎず、内容は（一部を除いて）その地の住民によって独自に埋められていく。

そう考えると、東加茂郡、西加茂郡、北設楽郡、南設楽郡、八名郡、宝飯郡、渥美郡はスタート時点が遅かったがゆえに、戦前までには十分な記述を各町村で為していくことが能わなかったのも、当然であろう。ただし、これらの地域に方言記述能力と関心とをもった人がいなかったわけではない。そのことを、次節で見えていく。

3.2 郡市町村史以外の特筆すべき方言記述・研究

第二次世界大戦以前、三河地方における方言研究は、管見の限り、『土の香』が出版された尾張地方で見られたようにはなされなかった。しかし、そんな中でも、特筆すべき記述が見られた。それは、北設楽郡の美輪村方言である。

愛知教育大学附属高等学校言語研究部編 (1973) は、北設楽郡にかつてあった三輪村において、『三輪村方言集』というガリ版刷り90ページ、収録語数約2,700の存在を伝えている（原本未見）。著者は、郷土研究家の山本隆氏。五十音順に並べられた語彙は、のちに、同言語研究部により、意味別に分類され分類語彙集として刊行されている。

同言語研究部 (1973) によると、豊川以西の三河において見られない鼻濁音が表記され、また、アクセントに関する表記も見られるなど、表記の工夫もさることながら、文法形式も丹念に拾われている点でも特徴があるとのことである。

なお、同言語研究部 (1973) には、『三河国北設楽郡方言集』(原田清・永江上枝次・岡田松三郎, 1934) の存在も示唆されており、『日本国語大辞典』の方言資料にも記載が見られるが、これについては、同言語研究部 (1973) に、「原本はない」と書かれている。

ただ、特徴ある語彙が存在する地域には、やはりそれを記述しようとする動きが生じることは確認されよう。予算が付き上梓されれば地域の共有財産となり、その機会を逸すれば時代の中に埋もれ日の目を見ないことになる。その差は紙一重であり、三河地方に方言研究の芽がなかったとは決して言えまい。

4. 昭和戦後期の愛知県三河地方における方言記述・研究

戦後、三河地方では、次の市町村史に方言記述が見られる。なお、豊橋市は1955年に、宝飯郡前芝村、渥美郡二川町、同高豊村、同老津村、八名郡石巻村を編入している。また、1959年、挙母市から改名した豊田市も、1960年代に碧海郡上郷町、碧海郡高岡町、西加茂郡猿投町を編入、さらに2005年、旧東加茂郡・旧東加茂郡全域を編入し現在の市域となった。岡崎市、西尾市、田原市でも大きな合併・

編入がおこなわれている。これらの町村では、合併・編入後に地域史が編纂されることもあるが、ここでは、合併後編纂された郷土誌を除き、その時点で存在した地方自治体によって編纂されたもののみを挙げた。

市町村史	発行年	配列順・項目数など	共通語の名称	方言形の扱い	備考
『高岡村誌』* (碧海郡→豊田市)	1956	品詞別, 意味別に306語	—	従	
『愛知県幡豆町誌』 (幡豆郡→西尾市)	1958	五十音順に631項目	標準語	主	注記に「大部分は『全国方言辞典』に拠った」とあり
『刈谷市誌』	1960	品詞別に247項目	標準語	従	
『小原村誌』 (西加茂郡→豊田市)	1964	語彙, 文法, 発音の特徴を概説。 語彙集なし	—	—	
『赤羽根町史』 (渥美郡→田原市)	1968	五十音順に608項目	標準語	主	
『碧南市史』 第2巻	1970	品詞別に325項目	共通語	従	
『一色町誌』 (幡豆郡→西尾市)	1970	五十音順に64項目	—	主	
『三好町誌 第1巻 風俗』 (→みよし市)	1972	741項目	—	従	
『小坂井町誌』 (宝飯郡→豊川市)	1976	特徴別に35項目	—	従	
『鳳来町誌 民俗資料編1』 (南設楽郡→新城市)	1976	解説のみ	—	—	
『豊田市史 10』	1978	概説, 語法の特徴と語彙381項目。	—	主	
『田原町史 下巻』 (渥美郡→田原市)	1978	五十音順に1257項目	標準語	従	
『額田町史』 (額田郡→岡崎市)	1986	談話中に見られる方言の注記として133項目	—	—	
『新編岡崎市史 19 史料 民俗』	1988	昔話の語注として順不同で133項目	標準語	主	
『豊根村誌 資料編2』 (北設楽郡)	1991	音韻の特徴, 文法に続き, 語彙は五十音順に641項目	—	主	音声や文法等の特徴解説多い。
『渥美町史 考古・民俗編』 (渥美郡→田原市)	1991	五十音順に815項目	—	—	別に文法記述あり。『渥美郡誌編纂資料』を参照とあるが, 未見
『津具村誌 資料編2』 (北設楽郡→同設楽町)	1998	五十音順に678項目	語意	主	例文あり
『新編安城市史 9 民俗』	2003	63項目	共通語	従	
『東栄町誌 自然・民俗・通史編』 (北設楽郡)	2007	自然動植物名231項目, 地名41項目, あだ名18形式, 「日常生活用語」多数**	—	主	あいさつに「へっ, あっ」あり

*: 碧海郡高岡町は、1956年に町制施行。1965年に豊田市に合併される。合併後の1968年に、もう一度『高岡町誌』を刊行しており、その中にも方言記述が見られる。

**：方言語形のみのもとの共通語との対応で示されたものがあり、形式数を一律に数えられない。

第二次世界大戦後、三河地方ではかなりの率で市町村史に方言の記述が見られる。方言の記述がまったく見られないのは、豊橋市、豊川市、蒲郡市、宝飯郡一宮町、同御津町、同音羽町、新城市、北設楽郡設楽町、同富山村、東加茂郡稲武町、同旭町、同足助町、同下山村、西加茂郡藤岡町、額田郡幸田町、幡豆郡吉良町、西尾市、安城市、知立市である。概して、産業に力を入れて、高度経済成長期に飛躍的な経済的な発展をしてきた地域に方言の記述が少ないと言えるが、やはり、郡史類に方言記述がなかったところには、方言記述に関する熱意の継承が乏しいと言ってよいかもしれない。

ただ、豊橋市内では、紅林太郎氏による『消えゆく方言～豊橋地方の場合』(1970)や、吉川利明氏による『豊橋地方の方言』(1972)、『豊橋の方言』(1993)など、在野研究者の記述・研究が見られる。吉川氏は、前述の愛知教育大資料を教諭として指導・編纂した実績を持つ。また、東加茂郡足助町(現 豊田市)でも、成瀬常雄氏による『足助の言葉』が、1993年から2001年にかけて5巻刊行されている。方言記述なしに編纂された市町村史を補って余りある記述がある場合もあり、あくまで市町村史における記述の有無はひとつの指向性の現れにすぎないのである。

市町村の独自性という観点では、豊橋市で1980年代を中心に、小中学校区ごとに郷土誌が多く編まれていることも興味深い²。小学生向けに編まれたこれらの郷土誌に方言の記述を含めたのは、わずかに『福岡むかしと今』のみである。このころの学習指導要領で、まだ方言は矯正すべき対象となっていたのであるから、むしろ当然と言えば当然であるが、『福岡むかしと今』には逆に時代を超えた大切な物を見る目があったと言えよう。

地域的に見れば、前述の豊橋地区のほか、やはり旧碧海郡地域が、方言に関する記述が豊富に残る地域である。旧碧海郡の刈谷市、碧南市、安城市などは、ことばに関心を強く持った碧海郡の伝統を引き継いだものと言えよう。反面、旧宝飯郡の豊川市や蒲郡市には、『小坂井町誌』(1976)と『塩津村誌』(1998)を除き、総じて方言記述が低調である。また、南設楽郡・北設楽郡のように、民俗語彙としての記述が中心となっている地域もある。この場合、農機具などの形ある物はよいが、動作や状況を表す抽象的観念語の記述が手薄となっている。やはり、方言の記述は民俗語彙とは別に必要なのである。

方言の扱いについて概観すると、戦前のような「標準語」に対応する方言形式を挙げるやり方から、俚言を拾い集めてそれに訳として共通語を添えるという形式への移行が見て取れる。このことは、方言記述の目的が、「標準語」の教育から、純粋に民俗的な記述へと移ったことを示している。つまり、方言が戒められるべき存在ではなくなったということである。このこと自体は歓迎されるべきものであるが、一方、廃れゆく俚言を採取して「博物館に納める」というのでは、人間と不可分な言語は即死してしまう。今こそ、記述や研究の次の手段を打っていかねばならない時期である。

5. おわりに

市町村史における方言記述の歴史から学べるように、市町村史は取捨選択の産物である。限られた人員が限られた予算内で限られた紙幅を埋めていく。その中で歴史に重きを置くものもあれば、民俗資料を掘り下げていくものもある。それらはそれらで、貴重な郷土の遺産であることは間違いない。尾張地方旧海部郡を中心とした民俗的な記述の集積は素晴らしいし、特に愛知県各地は戦国時代を中心とした話題に事欠かない地域であるためその歴史に関する記述には多くの紙幅が割かれていて、記述の厚みがあることは歓迎されるべきことである。

しかし、ことばは人類固有の財産である。この無形の文化財は、残そうと意識しなければ消えていっ

2 『ふたがわ』豊橋市立二川小学校「ふたがわ」編集委員会(1964)、『とよおか誌』豊橋市豊岡中学校職員会編(1982)、『こざわ誌』小沢小学校こざわ誌編集委員会編(1985)、『福岡むかしと今』豊橋市立福岡小学校校区誌編集委員会編(1985)、『郷土誌下地』豊橋市立下地小学校郷土誌編集委員会 藤田直正編(1986)、『郷土誌 たかね』豊橋市立高根小学校編(1985)、『むろ』豊橋市立牟呂小学校編(1987)、『わが町 羽根井』豊橋市立羽根井小学校編(1987)、『郷土誌 老津』豊橋市立老津小学校編(1990)

てしまうものである。古い「標準語教育・方言撲滅」の呪縛から離れ、歴史的な生き証人を多く含む言語変種としての価値を見出していくべきものでもある。

ただ、残念なことに、方言は市町村史編纂において優先順位の高い位置に置かれていない。

方言に関しては、過去に記述があるからもう十分だという考え方も根強い。しかし、古い方言だけでなく新しく生じる方言もある。岐阜市で言えば、「ガバリ（画鋏）」は消えつつあっても「B紙（模造紙）」は日常使われる方言である。さらには、「カド・ケド（漢字ドリル・計算ドリル）」や「ウドンつなぎ（大縄跳びの一種）」などという、新しい学校方言形式も生まれている。さらに否定辞の「～ヘン」は、強意的な意味がなくなり普通の否定辞として「～ン」の代わりに使われ、一段動詞では「食べーヘン」から「食べヘン」への変化も生じている。平成には平成の方言もあるし、研究によって明らかになった方言の分布や語誌なども多くある。方言はいつの世でも記述されるべきものである。

これから編まれる市町村史においても、方言がその価値を正しく認識され、きちんと記述されていくことが大いに望まれる。そして、その先にある方言教育の礎としたい。

【付記】

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究 (C)「愛知県・福井県の方言データベース構築および岐阜県方言との関連における総合的研究」（課題番号26370532, 代表：山田敏弘）の研究成果の一部である。

【参考文献】（本文中に引用した方言資料は除く）

- 国語学会編 (1961)「方言研究小史 ー明治初年から終戦までー」『方言学概説』武蔵野書院
国語調査委員会編 (1905)『音韻調査報告書』(1986 国書刊行会より復刻)
国語調査委員会編 (1906)『口語法調査報告書』(1986 国書刊行会より復刻)
東條操 (1938)『方言と方言学』春陽堂
東條操 (1958)「方言研究のあゆみ ー国語調査委員会と東京方言学会と雑誌『方言』『国語学』35
竹田晃子 (2008)「明治期国語調査委員会による音韻口語法取調の概要と第2次調査資料の分析」
『日本方言研究会 第87回研究発表会 発表原稿集』
山田敏弘 (2010)「岐阜県における方言研究・記述の歴史」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』
58-2
山田敏弘 (2014)「愛知県尾張地方郡市町村史に見られる方言記述・研究」『岐阜大学教育学部研究
報告 人文科学』63-1